

ハンガリーの戦後60年

盛田 常夫

第二次世界大戦が終結して60年。日本でも世界でも、それぞれの60年が回顧されている。アジアにおける侵略者が日本だったとすれば、ヨーロッパにおける侵略者はナチスドイツ。しかし、ハンガリーはドイツと同盟を結び、第一次世界大戦で失った領土を回復しようとした。ドイツの目下の同盟者ハンガリーでは、終戦直前に、大規模なユダヤ人迫害が起きた。ハンガリーの終戦60年は、まさにこのユダヤ人迫害を出発点としている。

なぜ、歴史は繰り返されるか

過去の記憶は次第に薄れていく。戦後の世界史を規定した社会主義体制の崩壊からまだ10数年しか経たないのに、その記憶ははるか遠くに去ってしまったような感じだ。イラク戦争すら、もう人々の関心を離れようとしている。めまぐるしい毎日の生活に追われて、過去の出来事は、人々の記憶から次第に風化していく。

まして、60年の時間が経てば、社会のほとんど人々が未経験の出来事になってしまうだろう。日本でもドイツでも、あるいは朝鮮でも中国でも、戦争経験のない世代が声を上げている。それぞれの国で独自の民族主義が生まれている証左だ。日本の政治家で積極的に靖国参拝を強行している人々の多くは、戦後世代だということを考えると興味深い。中国や朝鮮が民族主義で、日本はそうでないというのは間違った認識だ。従属しているアメリカにたいする自立を求める民族主義ではなく、日本の政治家のそれは旧宗主国としての対アジア盟主意識という歪んだ独特の民族主義だ。

人々の記憶が薄れ、歴史的出来事への反省が風化する。だから、人類の歴史には繰り返される事件が多い。アメリカのイラク侵略も、ヴェトナム侵略の記憶が風化した起きた事件だと言えよう。アメリカの政治家はヴェトナム戦争の

トラウマから脱却するチャンスと見たのだろうが、しかし歴史は繰り返された。歴史が繰り返される背景には、歴史の合理化による書換えがある。日本のアジア侵略はアジア人民のための自衛の戦争だった、と。

文明が発達すれば、事件の再発が防止されるだろう。人類がもっとも賢くなったはずの20世紀に、各種の戦争で何億もの人が殺害されたことを考えると、単純には言えない。人類の歴史の中で、20世紀は大量殺人が連続した、もっとも残虐な世紀だった。

だから、歴史教育が大切なのだ。繰り返し過去の愚行を学び、人類の記憶を後世の世代に伝達・継承しなければならない。そうすることでしか、人類は過去の愚行の再発を予防できない。

ハンガリーのユダヤ人迫害問題

ケルティース・イムレの小説『運命ではなく』やサボー・イシュトヴァーンの映画「サンシャイン」（邦画「太陽の雫」）、あるいは経済学者の自伝『コルナイ・ヤーノシュ自伝』（11月刊行予定、日本評論社）には、ハンガリーで起きたユダヤ人迫害の様子が描かれている。ドイツ軍がハンガリーに進駐したのは1944年3月19日。これを境に、翌年初めにドイツ軍がソ連軍によって撃退されるまでの10ヶ月の間に、大量のユダヤ人の迫害・虐殺が起きた。数十万人のユダヤ人がアウシュヴィッツ送りになった。労働能力のある者は労働キャンプへ、労働能力のないものはガス室へ送られた。

ホルティ政権がソ連との休戦協定を結んだ1944年10月15日以降、ハンガリーではナチスドイツに代わって、ハンガリーのファシスト勢力である矢十字党が、残虐なユダヤ人狩りを始め、無差別な暴行殺人を行った。ここから、ユダヤ人の迫害・虐殺におけるハンガリー人の倫理的・道義的責任を問う問題が提起されてきた。本家

のナチスに代わって、ナチス以上の残虐さでハンガリーユダヤ人の殺害を行ったのは何故か。

戦後、矢十字党の幹部の多くは処刑されたが、かなりの党員が国外へ逃亡した。今、オーストラリアに居住しているチャールズ・ゼンタイが、ヴィーゼンタール・センターから告発を受けている。旧ナチ告発の最後の摘発行動の一環として、ユダヤ人殺害に関与した人物の行方を追っている。オーストラリアには偽名を使って逃亡した矢十字党員がまだ生存している。

歴史には、侵略者に代わって、自国の民を抑圧する勢力が必ず存在する。いわば傀儡勢力である。虎の威を借りて闊歩する。その存在理由を考えると、社会の仕組みが良く分かる。

それにしても、日本では戦犯が靖国に祭り上げられ、それが日本の伝統的精神だと現役の大臣が語る。戦争犯罪にたいする意識は、日本とヨーロッパではこれほど違うのだ。

ダバイ・チャスイ

ナチスドイツを撃退したソ連軍。解放軍のはずだったが、ハンガリーでもいろいろ問題を起こした。コルナイの自伝の中に、ソ連軍によって解放された瞬間に、兵士からダバイ・チャスイ（Давай часы）と時計を渡すように指示されたという描写がある。悪い予感だった。その後、何度もソ連軍兵士は武器を持って住宅に押し入ってきたという。強姦事件も多発した。ソ連軍司令官は兵士の不穏な行動を見て見ぬ振りをしていて。命を賭けて、遠方までやってきた。それ位の見返りがあっても良いだろうということだ。この当時の世界の軍隊の倫理はこの程度のものであった。

ソ連軍はハンガリーから軍事捕虜として40数万人、民間人数万人をソ連本国へ連行した。労働キャンプに送られたのである。戦勝国が戦利品として強奪したものだ。20世紀の事件とは思われないが、ほんの60年前の人類はまだこの程度のレベルにあった。もっとも、人類はそれからどれほど進化しているだろうか。

戦後社会主義

戦後、多くのユダヤ人知識人がハンガリー共産党に加わった。ユダヤ人虐殺から解放してくれた共産主義勢力は、いわば命の恩人だった。映画「サンシャイン」の主人公の戦後の描写はまさにこのプロセスを描いている。ソ連帰りの共産党幹部の中にもユダヤ人は多かった。ハンガリーの小スターリンと呼ばれた・ラーコシ・マーチャーシュもユダヤ人だった。

しかし、戦後の共産党支配はスターリンのソ連の指揮下にあり、ハンガリー共産党内にスターリン型の恐怖政治が持ち込まれた。スターリンの死後、1956年2月のソ連共産党大会におけるフルシチョフのスターリン批判によって、ハンガリー共産党内部の亀裂が大きくなり、他方で社会の緊張が解け、住民の不満が容易に爆発する条件が整った。それが大きな社会変動をもたらした。

1956年10月のハンガリー動乱で立ち上がった人々の中には、共産党の非主流派で、恐怖政治にたいする批判を展開したユダヤ人たちもいた。自らが築いた体制を崩壊させることで、自らが犯した過ちを質そうという信念をもつ人々であった。その典型が、ギメシュ・ミクローシュである。

ソ連の戦車による動乱鎮圧の後、ナジ・イムレやギメシュを含め、229名が死刑判決を受け、絞首刑となった。動乱鎮圧によるいわゆる粛正は50年代末まで続いた。体制転換が始まった1989年6月16日に、ナジやギメシュの再埋葬式が、ブダペストで盛大に挙行されたことは、まだ記憶に新しい。

1960年代初めから始まった米ソの平和共存路線に従って、ハンガリーはカーダールの「グヤーシュ共産主義」時代に入った。これは国民の生活条件を向上させることで、社会主義への反発をなくしていく社会主義のハンガリー型ヴァージョンだった。その資源が枯渇した所で、グヤーシュ共産主義時代が終焉を迎え、体制転換の時代を迎えることになったのである。

（関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい）